



サクラグループ ゆかりの地
日本橋本町



Since 1598



発行:  サクラグローバルホールディング株式会社

企画・制作:  一般財団法人 松本記念財団

協力: SGHC 資料・保存編集室



江戸時代、日本橋本町は「薬種商の町」として大いに栄えました。道沿いには薬種問屋が軒を連ね、全国から集められた生薬や漢方薬が取引される様子は、まさに医療の中心地にふさわしい賑わいでした。その後、この地からは、製薬・医療機器産業を支える数々の企業が誕生しました。サクラグループもその一つです。江戸幕府の始まりとともに日本橋本町に居を構え、時代の流れを経て、漢方薬から医療機器の分野へと事業を展開。現在では「サクラグローバルホールディング」[※]として、日本橋本町から、世界150か国以上に医療・ヘルスケアソリューションを提供する企業へと成長を遂げました。「くすりの街」日本橋本町には、薬の神様を祭った神社など今もその歴史を伝える石碑や町名が残っています。また、街並みは、和のテイストを取り入れたモダンなデザインの高層ビルに囲まれ、過去と未来が調和する場所に整備されました。この地に根を下ろしたサクラの営みは、本町の歴史と交差します。

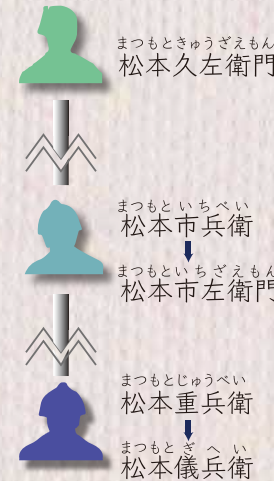


私たちサクラグループは、日本橋本町で、150年以上にわたり医療の進歩とともに歩んできました。その歴史は、製品の開発や事業の拡大にとどまらず、常に「医療に新しい可能性を拓く」という使命感に支えられてきました。幾世代にもわたり受け継がれてきたパイオニア精神は、今もお、私たちのDNAとして息づいています。

いま世界はAIの時代を迎え、医療の姿も大きく変わろうとしています。情報は瞬時に集まり、診断や治療の在り方は新しい局面を迎えています。しかし、どれほど技術が進んでも、医療の本質は「人の命と健康を守る」ことです。だからこそ私たちは、AIをはじめとする先端技術を取り入れつつも、人に寄り添う医療の在り方を大切にしなければなりません。

長い歴史と日本橋本町に息づくDNAを受け継ぐ私たちに課された使命はただ一つです。それは、革新を恐れず挑戦を続け、確かな品質と信頼を礎に、世界中の医療現場に新たな価値を届けることです。私たち一人ひとりがその使命を胸に刻み、日々の仕事の中で具現化していくとき、サクラは次の時代においても医療の未来をリードし続ける存在であり続けます。

松本謙一



サクラグループの歴史は今から400年前、大阪泉州堺の「いわしや」という薬種商(薬を扱う問屋)に遡ります。慶長年間に松本久左衛門が、網元として薬種商を始めたのが始まりです。「いわしや」という屋号は、網元としての名残です。やがて家康の時代が始まり、大阪から江戸へと政治経済の中心が移ります。「いわしや」は、松本市兵衛へと引き継がれ、寛永年間に江戸へ進出しました。市兵衛は数代後に市左衛門に改名。薬種商として日本橋本町で、薬種商の本店で繁盛しました。1830年から1844年の天保年間には薬種商として薬だけでなく外科道具を扱っていた記録があります。また江戸に進出後200年がたった嘉永6年(1853年)に松本重兵衛(のち松本儀兵衛に改名)が誕生してからは、「鰯屋松本市左衛門店」として外科器具の取扱部門があったとの記録もあります。

「江戸名所図会」にある「鰯屋松本市左衛門店」
天保年間の江戸の地誌



「薬種・鰯屋」の大看板と「いわしや」、「鰯屋」と書かれた暖簾と主要商品の「錦袋子」、「白龍香」、「外科道具」の看板が見えます。

医療器械専業へ移行の時代

松本儀兵衛 (1853年～1925年)



明治2年、新政府がドイツ医学の導入を決定し、漢方医学から西洋医学への転換が急速に進みました。医療製品はドイツ製品が中心で、医療の現場に次々と導入されました。この市場にいち早く着目したのが、いわしや松本市左衛門です。そして明治4年(1871年)薬種商「いわしや松本市左衛門店」に、医療器械専売部門が設立されました。これが現在のサクラ精機の礎をなすものです。その後筆頭番頭であった松本重兵衛は六代目儀兵衛を襲名し、医療器械専売部門の販売責任者となりました。その後明治16年(1883年)松本儀兵衛は独立し「いわしや松本儀兵衛店」を開きます。松本市左衛門の『医用器械図譜』は、いわゆる製品カタログで、新しい医療器械の販売資料というだけでなく、地方の医師たちにとっては教材となり、製造販売者の高い誇りを表すものでした。また、広告も積極的に展開して、医療器械の販売を推進しました。



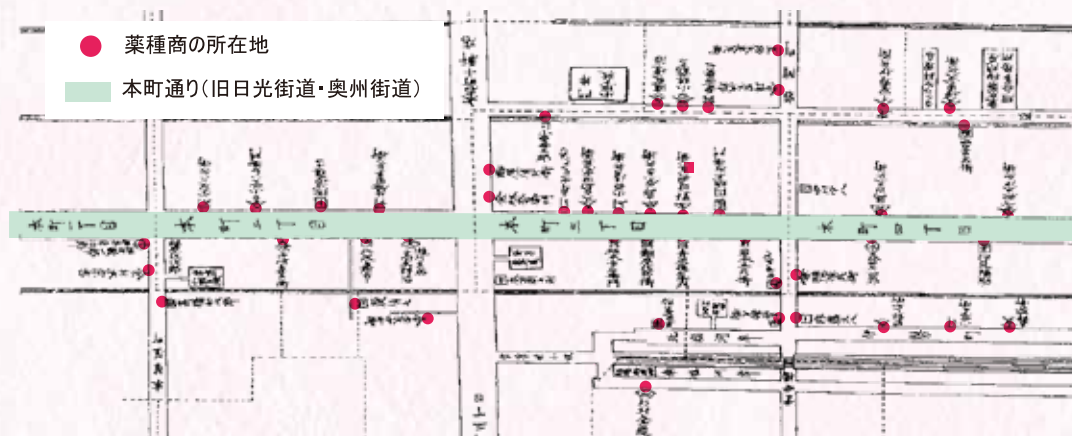
『医療機器図譜』(明治11年刊): 150ページ以上に渡り製品が掲載され、当時の医療水準がわかります。



らくはっさん
烙白金(プラチナ)を使った焼灼器具の広告: 組織を焼く治療等に用いられました。

多くの薬種店が集まる本町通り

明治十七、八年頃東京薬種問屋人名所在の図



川柳に歌われた本町通り

三丁目句はぬ店は三四軒

街中が、生薬を乾す匂いで満ちていた。

袋町ともいひさうな三丁目

薬種店の看板は、大きな薬袋であった。

三丁目醫者の蔵宿らしいところ

蔵宿は御家人などに支給される俸禄米の蔵。医者にとって大事な薬を扱う店のある三丁目。

本町の鯛屋下物賣らぬところ

酒の肴(さかな)と下物(さかな)は等品の意味を重ねている。「似せ薬」は売っていないということ。

東京名物誌にある「いわしや」

東京名物誌 明治34年刊

『江戸名所聞見』を編く者は、本町通に軒頭高く、鯛丸の看板を掲ぐる「いわしや」の圖あるを知らん。其地其家を同じうして(口繪参照)今尚居然大家の風を存し、而して繁華の盛なること往時に倍する者は即ち本店にして、凡そ都下藥種店多しと雖、最も有名なる老舗と云へば、固に本店たるを知らず、其繁華の隆昌亦共に比肩する者なし。故に「いわしや」の名は、殆ど藥種店及び醫療器械店の名を意味するが如く、本店と秋葉の繁盛なき者にして新に店舗を開き、漫然「いわしや」の聲を掲ぐる者都下各處に散在し、皆各家業の盛大を致せるを見れば、「いわしや」の名が世人に信ぜらるゝの篤きを見るに足るべし。

いわし松本市左衛門 (日本橋本町三丁目一八番) (電話本局七五二番)

江戸の薬種店と言えば、誰もが知る「いわしや」

お店は繁盛し、他に肩を並べるものがないほどで、「いわしや」は薬種商、医療器械店の有名店と言えます。



創業と技術基盤形成の時代

松本福松 (1868年～1950年)

創業と事業開始

松本福松は大阪で丁稚奉公を経験した後、上京し、明治20年(1887年)いわしや松本儀兵衛店に就職しました。そして、明治34年(1901年)1月に東京・日本橋本町で「合資会社いわしや松本器械店」を創立し、外科刀類を中心とした医療器械の製造と販売を開始しました。

医療現場と向き合うものづくり

日本橋本町は医療・学術・流通の中心地であり、福松は医師や研究者と直接対話を重ね、現場の要望を事業に反映させました。また、製品の販売だけでなく、修理や調整にも対応する姿勢を持ち、器械の改良と信頼の獲得に努めました。

義手足談刊行

明治後期から昭和初期にかけて、日本は戦争と急速な産業化の時代を迎え、戦傷や労働災害による四肢切断者が増加しました。こうした社会状況のもとで、松本福松が著した『義手足談』は、義肢製作を単なる職人技の域にとどめず、解剖学や機械的合理性に基づく近代的医療技術として体系化しようとする試みでした。本書は、失われた身体機能を補い社会復帰を支えるという新しい思想を提示するとともに、義手義足を「自立を可能にする装置」として位置づけた点に大きな意義があります。

業界初の自主展示会

昭和20年代には東京で業界初の自主展示会を開催し、医師や技師が製品を直接触れながら意見を交わす場を提供しました。この展示会は販売促進だけでなく、現場の課題や改良点を共有する情報交換の場として機能しました。



国産初の正式顕微鏡
エム・カテラ顕微鏡
IV型(大正3年)

エム・カテラの開発

明治末期から大正期にかけて、当時、多くの医療器械は輸入に依存しており、価格や供給、修理体制に課題がありました。松本福松が常に念願してやまなかったことは、外国製を凌駕する国産品づくりでした。こうした中で、大正3年(1914年)に開発されたエム・カテラ顕微鏡は、日本で初めて工業的量产に成功した国産光学式顕微鏡として注目されました。福松のあくなき技術革新の情熱によって、昭和9年(1934年)「千代田顕微鏡」が誕生(エム・カテラから改名)。千代田光学は、戦後もわが国の顕微鏡工業の発展に貢献しましたが、昭和51年(1976年)に会社を閉じ、その顕微鏡事業の一部はサクラファインテックジャパンに引き継がれています。エム・カテラ顕微鏡は平成26年(2014年)国立科学博物館の未来遺産に登録されました。



エム・カテラの名前の由来と発展



エム・カテラの名称の由来となった事業者・共同制作者のうち松本福松(M)は、エム・カテラ光学製作所(後の千代田光学工業)を加藤嘉吉(KA)はカルニュー光学器械製作所(現島津デバイス製造)を設立しました。寺田新太郎(TERA)は山下長が設立した高千穂製作所(現オリンパス)で顕微鏡を製作しました。さらにこの技術を継承した顕微鏡会社の設立が続き、エム・カテラの製造技術はわが国の顕微鏡工業創世の礎となりました。

業界基盤づくりへの努力

明治44年(1911年)には東京医科器械同業組合を設立し、初代理事長として業界内の意見集約や取引慣行の整理に尽力しました。また、医科器械研究会を通じて技術情報や学術的知見の共有を進め、これらの活動は後に日本医科器械学会(現日本医療機器学会)へと発展しました。

松本福松が築いた技術基盤と業界との信頼関係は、次代の経営へと引き継がれました。製造技術、人材、取引先との関係性は、戦後の混乱期においても事業継続を支える重要な要素となりました。現場と向き合い、技術と誠実さを重ねる姿勢は、その後の経営にも活かされています。



成長と制度改革の時代

松本善治郎 (1901年～1973年)



戦後復興と経営再開

太平洋戦争により、日本橋の本社と本所の工場は焼失し、昭和20年(1945年)4月、軍より緊急疎開命令が出されました。多くの従業員は長野へ移り、疎開工場での生産活動に入りました。終戦後の昭和22年(1947年)4月、東京日本橋の焼け跡に本社屋を再建し、営業を再開しました。同年5月には松本善治郎が「株式会社いわしや松本器械店」の社長に就任し、本格的に経営を担うこととなりました。戦後の医療器械業界は、資材不足と生産設備の喪失により厳しい再出発を余儀なくされていました。医療制度や流通体制も未整備な中、各社は事業再建と医療現場への供給責任を同時に担う状況にありました。

本社移転と企業基盤の整備

昭和33年(1958年)、武田薬品工業株式会社と土地交換を行い、本社所在地を日本橋本町二丁目から日本橋本町三丁目の現在地へ移しました。続く昭和35年(1960年)には、地下1階・地上4階建て(後に5階へ増築)の新本社ビルが完成しました。新社屋には、製品展示機能や研修機能が整備され、営業拠点としてだけでなく、業界関係者が集い情報交換を行う場としても活用されました。昭和37年(1962年)、社名をサクラ精機へ変更し、医療器械専門メーカーとしての姿勢を明確にしました。



移転前のいわしやの場所



移転後に完成した新社屋



新社屋の製品展示室

独自製品開発への取り組み

戦後(昭和20年代末頃)になると医療器械業界は同業者間の過当競争により値引き合戦で、利益率低下を生み、経営を圧迫し厳しい状況となりました。善治郎は慢性的な運転資金不足に悩まされながら、この事態を打開するため他社製品を凌ぐ優れた独自製品の販売など懸命に取り組みました。板金、塗装、組み立て工場を増設し、自主生産体制を強化。また、一層の医療器械製造の発展を図るため、昭和32年(1957年)福松が創設した千代田製作所を株式会社に改組しました。(新社長は七尾鍊一)

当時の中核製品の事例



新製品の発表相次ぐ！



手研ぎから研究者を解放した
ミクロトーム刀自動研磨機
第一号品



国産初の自動固定包埋装置
サクラロータリー(RH-12型)



終戦後の繃帯材料消毒装置

戦時中から戦後にかけて活躍した「一八式電気孵卵器」は今でも「細菌培養用インキュベーター」です。終戦後の食糧難の時代、肺結核と赤痢の蔓延で、孵卵器は高い需要があり、全国の保健所に納入されました。その後開発が重ねられミクロトーム刃自動研磨機やオートクレーブなど多くの製品が加わりました。



一八式電気孵卵器

業界団体での指導的役割

昭和37年(1962年)、東京医科器械同業組合の理事長に就任しました。また同年、日本医科器械商工団体連合会会長、さらに昭和43年には、日本医科器械学会理事長にも選任され、名実ともに医療機器業界を代表するリーダーとしての地位を確立しました。

流通改革と特約店制度の導入

昭和33年(1958年)、善治郎は流通改革に着手し、業界初となる新特約店制度を開始、第1回特約店会議を開催しました。これは、販売と保守を一体化した体制を全国に構築し、製品知識や技術情報を共有することで、地域差のないサービスを提供するものです。制度の発足にあたり、取引先の中から優良企業21社を特約店として選定しました。この制度は、販売効率の向上と保守体制の均質化をもたらし、医療機器業界の流通体制にも大きな影響を与えました。

善治郎は業界団体の要職を務めることで、業界内の調整や行政・医療界との意見集約にも深く関与しました。善治郎の時代は、企業規模の拡大とともに、制度と組織を整えた時代であり、こうした長年にわたる多方面での功績が評価され、昭和46年(1971年)に旭日小綬章を受章しました。

グループ化と国際展開の時代

松本謙一（昭和50年代～）

海外展開の原点－欧米視察から始まった第一歩

昭和38年（1963年）、松本謙一はサクラ精機として初めて、欧米への単独出張に赴きました。74日間に及ぶ長期出張では、ロンドンで開催された「国際病院設備及び医療機器展示会」への出展をはじめ、欧米の医療機器市場の実態を自らの目で把握し、将来の海外展開の可能性を探りました。その体験は、その後の国際展開に向けた重要な出発点となりました。

海外提携による国際化－技術と市場の融合

昭和45年（1970年）、サクラ精機は、滅菌装置分野で世界的評価を受けていた米国アムスコ社と業務提携を結びました。同社の高度な技術とノウハウはサクラ精機の滅菌装置開発に活かされ、製品の品質と信頼性を飛躍的に高めました。さらに同時期、米国マイルス・三共株式会社との販売提携を通じて、病理組織標本作成機器「ティッシュ・テック」のシステム販売を開始し、事業領域を大きく拡張する契機となりました。

品質と体制の確立－人材・生産基盤の強化

昭和50年代に入ると、医療機器業界は成熟期を迎え、国際基準への対応や品質保証体制の確立が強く求められるようになりました。サクラ精機は製品開発にとどまらず、人材育成と生産体制の強化にも注力しました。

昭和53年（1978年）には長野に教育センターを開設し、さらに昭和56年（1981年）には千曲工場が完成し、大型滅菌装置の本格的な生産体制を確立しました。

病理事業の世界進出－分社化とグローバル展開

サクラ精機は病理診断事業を分社化し、昭和61年（1986年）に米国でサクラファインテックUSAを設立、世界市場への本格参入を果たしました。その後、アジアや欧州へと拠点を拡大し、現在では欧州に14拠点を構えるまでに成長しています。平成13年（2001年）にはサクラファインテックジャパンを設立し、国内外における病理診断事業の体制強化を進めました。



サクラファインテックUS



サクラファインテック
ヨーロッパ（オランダ）



櫻花医療科技（泰州）有限公司
（中国）



千曲工場（長野）

サクラファインテックヨーロッパ（オランダ）

櫻花医療科技（泰州）有限公司（中国）

サクラファインテック（US）

グループ経営の完成－二つの中核事業へ

平成17年（2005年）、千代田製作所とサクラ精機の合併により、新生「サクラ精機」がスタートしました。さらに、平成21年（2009年）サクラグローバルホールディングが設立されて、「感染制御」と「病理診断」という二つの事業を中核とするグループ体制が確立されました。



キューバのカストロ首相と



ウズベキスタンのミルジョーエフ大統領と



ワールドヘルスエキスポ 2026

業界と社会への貢献－医療の未来を支える力

謙一は、企業経営にとどまらず、医療機器産業全体の発展と人材育成にも尽力しています。（一社）日本医療機器産業連合会（医機連）、（一社）日本医療機器工業会（日医工）、海外医療機器技術協力会（OMETA）などの業界団体において、長年にわたり業界の方向性づくりに携わっています。また次世代育成への取り組みとして、平成25年（2013年）には（一財）松本記念財団を設立し、世界で活躍できる医療・ヘルスケア人材の育成を支援しています。さらに、再製造単回使用医療機器（R-SUD）やGS1ヘルスケアジャパン協議会への参画を通じ、環境配慮と医療DXの推進にも貢献しています。こうした企業経営と社会貢献の両面での功績が評価され、平成8年（1996年）に藍綬褒章、平成19年（2007年）には旭日中綬章を受章しました。



謙一は、昭和後期から現代に至る日本の医療機器産業において、国際化、品質、そして社会的価値を一貫して追求し続けた指導者です。医療機器を単なる「医療の道具」から、「社会を支えるインフラ」へと進化させた存在といえます。



江戸幕府が最初に作った町、日本橋本町



本町という町名は、徳川家康が最初に地割を行った地で、江戸又は日本橋の日本橋本町は、商業地として恵まれた立地を背景に発展してきました。なかでも三丁目は、かつて薬種商や医薬品流通の中心地として栄え、その歴史を受け継ぐかたちで、明治時代以降、製薬会社がこの地に根付いていきました。現在も日本橋本町には、医薬品産業と深く関わる企業が多く集まっています。

江戸の「金座」の由来

江戸の「金座」は、徳川家康が京都の金細工師・後藤庄三郎を招いてつくらせた金貨・小判の公式製造所。江戸・京都・駿府・佐渡に分散していた金座はやがて江戸に一本化されます。現在の「銀座」という地名は、同じく銀貨をつくった銀座役所があった場所に由来します。



日本橋

日本橋川にかかる橋で、1603年に架けられ、東海道や中山道など五街道の起点として日本の中心でした。同じころいわしやが泉州堺から江戸に移り、商売をはじめました。



大名行列

日本橋室町は、江戸時代の参勤交代という重要な制度の中心地であり、多くの大名行列が行き交う活気ある場所でした。いわしやの店が並ぶ通りも日光街道、奥州街道で大名行列が通った道でした。



福德神社

福德神社は芽吹神社とも呼ばれ、貞観年間(859~876年)創建されたと伝えられ、五穀豊穡の神(倉稲魂命)を主祭神として江戸時代には徳川家康や秀忠も参詣したそうです。



明治初期の福德神社

老舗の店



☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
 「越後屋呉服店」「木屋」「にんべん」「山本海苔」
 「千疋屋」など今でも残る老舗が数多く並んでい
 ました。中でもひととき注目を集めたのが江戸
 の豪商・三井高利が開業した「越後屋呉服店」
 です。それまでの常識を破る「呉服商い」で成功
 を収め、のちの「三越百貨店」へと発展しました。
 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

所在地は当時の所在地付近



江戸時代の越後屋呉服店

江戸の「粋」が今も息づく街

日本橋室町は、江戸の商い文化が今も息づくまちです。この界隈の中心に建つ三井本館は、昭和4年(1929年)に完成した重厚な石造りの建物で、現在は国の重要文化財に指定されています。最近では銀行マンや検事などのドラマ撮影でも利用されています。周囲には、「木屋」「にんべん」「山本海苔」など、江戸時代から続く老舗が今も暖簾を掲げています。包丁や調味料、海苔など、それぞれの店が職人の技と伝統の味を守りながら、現代の暮らしに寄り添う商品を提供しています。

COREDO室町 — 伝統と現代が響き合う「日本橋の新しい顔」

「COREDO(コレド)」は、「CORE(中心・核)」と「江戸(Edo)」を組み合わせた言葉で、“江戸の心を未来へ伝える街の中心”という思いが込められています。夜にはライトアップされた街並みが美しく、古き良き江戸の情緒と現代的なデザインが調和した、日本橋を代表するランドマークです。

日本銀行本店と「円」の不思議なつながり

日本銀行本店の建物は、国の重要文化財に指定されており、かつて金貨をつくっていた「金座」の跡地に建てられました。上空から見ると、その建物の形がまるで「円」という漢字のように見えるのが特徴です。しかし、明治時代までは日本の通貨単位は旧字体の「圓(えん)」と書かれており、まさに偶然のいたずらのような不思議な一致といわれています。

金融の街であった日本橋を知る博物館

日本銀行が運営する博物館で、日本の貨幣や金融の歴史をわかりやすく紹介しています。和同開珎から現代の紙幣・硬貨まで実物展示が充実し、江戸時代の金貨や日本橋と金融の関わりも学べます。入館無料で、歴史散策の立ち寄り先としても人気です。

歴史を伝える石碑や案内板

Attention!!

- ① 本町通り石碑
- ② 十軒店跡
- ③ 薬種問屋の集積地・本町(石碑と案内板)
- ④ この土地の歴史案内板

薬の祖を祀る 薬祖神社

医療と薬の祖といわれる『日本書紀』にも登場する神様、大己貴命(おおなむじのみこと)と少彦名命(すくなひこなのみこと)を祀っている。「薬の街」日本橋本町のシンボル。

日本橋室町のパワースポット 福德神社

福德神社は、金運や商売繁盛のご利益で知られる日本橋の由緒ある神社です。江戸時代には最高額300両という高額の高くじ(現代でいう宝くじ)興行を許された数少ない神社で、「願いが当たる」とされることから、ライブやイベントなどの当選を願って参拝する人も多く、“推し活神社”としても注目を集めています。

